



ようこそ立沢里山へ



立沢里山の会

■目 次

「立沢里山の会」活動 20 周年を迎えて 立沢里山の会会長	清野 修・・・1
「立沢里山の会」の 20 周年を祝して 守谷市市長	松丸修久
里山の会 20 周年を迎え 守谷市農業委員会 前会長	海老原邦夫
I. 立沢里山の 20 年を振り返る	・・・3
II. 皆が楽しい立沢里山（立沢里山の紹介）	・・・10
III. 里山は自然の宝箱（立沢里山のいきもの）	・・・14
IV. 守谷の自然と市民活動	・・・19
V. 写真で綴る 20 年	・・・31
VI. 里山新聞の発行等	・・・59
VII. 20 周年に寄せて	・・・63
「立沢里山の会」活動 20 周年を祝して 守谷市教育委員会 教育長 町田 香	
立沢里山体験からの学び 御所ヶ丘小学校	
稲作体験を通して 松前台小学校	
立沢里山の会 20 周年に寄せて 大井沢小学校	
里山 20 年を迎えて 立沢里山の会 初代会長	鈴木 榮
立沢里山の会発足 20 周年おめでとう 守谷やまゆりの会会長	浅川利夫
20 周年を祝って 立沢里山の会 初代副会長	奥村峰子
立沢里山での観察会 会員	新田ミチ子
里山に魅せられて 会員	南 哲郎
立沢里山と私 会員	小田原 実
VIII. 立沢里山の会活動年表	・・・69
資料一覧（CD 収納）	・・・77
編集後記	・・・78

「立沢里山の会」活動20周年を迎えて



立沢里山の会 会長
清野 修

当会は大規模都市開発で残された田んぼを再生し、子供たちに自然との触れ合いの場を提供することなどを目的として、2000年12月に設立されました。この間、活動に参加された皆様、ご支援いただいた皆様に心から感謝申し上げます。特に創成期から現在も当会の顧問としてご指導いただいている守谷市農業委員会前会長の海老原邦夫氏には改めて御礼申し上げます。

活動20周年を迎え記念誌を発行することとなりましたが、新型コロナの影響で資料収集や打合わせの困難な状況が続き、ようやく取りまとめることができました。

里山活動の中心は地元の3小学校児童の稲作体験です。毎年ほとんど初体験の200人以上の子供たちが参加しますが、田植えの最初の10分間ほどは悲鳴だけで全く作業にはなりません。「キャー冷たい！いやッ温かい」、「汚い！あれっ気持ちがいい！」と先入観が次々と覆り、田植えを終えて帰る際の顔つきは明らかに生き生きと変化しています。

事前の出前授業で「田んぼは自然そのもので、自分の思うようにはなりません。最初は泥に足をとられて一步も歩けないと思います。対処方法として三つ覚えておいてください。田靴を履いてゴム紐を縛るなどしっかりと**準備**すること。動けなくなったら**焦らず**、つま先を下げてゆっくりと引っ張れば抜けます。それでもだめなら友達や大人の**助け**を呼んでください。

これは皆さんが大きくなって社会に出て人生の泥沼にハマった時にも、準備・焦らず・助けの三つの対処方法は役に立つと思います。」

青少年による無差別殺人事件などが近年話題となっていますが、記事を読んでも幼少期はむしろ恵まれた環境で成績も優秀な子供が、大きくなって挫折し自暴自棄になったケースが多いと感じます。子供の時に自分の思うようにならない自然を体験していたらと考えずにはおられません。思うようになることだけが幸せとは限りません。むしろ思わぬことには予期せぬ楽しさや素晴らしい感動すらあることを知ってほしい。人間もまた自然の一部であることを実感してほしいと思います。そんなことから、里山の会としては「子供を里山の自然に呼び戻そう！」を合言葉に取り組んできました。

そこに今回の新型コロナ問題です。パンデミックは歴史的には幾度も繰り返されてきていますが、近年は瞬く間に世界規模で蔓延してしまいます。経済優先主義による環境負荷に加えて、急激な国際化や過度な都市集中が拍車をかけたことは否定できません。人類は発祥の時代から生きるすべを自然から学んできました。文明が発達する一方で自然環境と遠くなり、自然と触れ合う機会が減少した人間社会に問題があるように思います。

コロナ対策だけでなく働き方改革などの影響もあるのでしょうか。リモートワークやオンライン授業が導入され、里山には平日の日中に遊びに来る親子が増えてきました。遠方への家族旅行などが制限され、身近な遊び場として田んぼの学校で里山体験した子供が両親や兄弟姉妹を誘って来ることが多いようです。

そうか子供だけではない。「親子を家族の絆を里山の自然に呼び戻そう！」を目標に、これからの里山活動を継続していければと考えているところです。今後とも関係各位のご支援をお願いします。

「立沢里山の会」の20周年を祝して



守谷市長 松丸修久

立沢里山の会が設立20周年を迎えられましたことを、心からお慶び申し上げます。また、清野会長をはじめ、会員の皆様や関係者の皆様には、日頃から地域の自然環境の保全にご尽力いただき、深く敬意と感謝を申し上げます。

立沢里山の会が設立されるまでの里山周辺の休耕田や湿地帯には、大小様々なゴミが不法投棄されており、地域の方々からも休耕田の有効活用についてご相談をお受けしている中で、里山周辺の環境保全を目的に、平成12年にボランティアの皆様や地域の皆様のご協力を得ながら、「立沢里山の会」が誕生いたしました。その後、皆様のご努力により「木道」や「田んぼ」が整備されたことで、今では地元の大井沢、御所ヶ丘、松前台の三つの小学校の貴重な「合同稲作体験学習」の場として活用させていただくことができました。

今後も、本市における環境政策の指針である、「第2次守谷市環境基本計画」を踏まえ、子どもたちが、幼少期から自然の恵みを体験できるよう、関係団体と連携しながら、環境保全活動への取組を推進してまいります。また、「わくわく子育て王国もりや」と、「地域主導・住民主導による市民王国もりや」を掲げる本市では、今後も引き続き、地域の皆様とともに、未来を担う子どもたちの環境教育や自然体験等の充実を図り、豊かな自然と触れ合える場の保全に努めてまいります。結びに、「立沢里山の会」のご発展と会員の皆様のご健勝を心からお祈り申し上げ、お祝いのことばといたします。

里山の会 20 周年を迎え



守谷市農業委員会
前会長 海老原邦夫

立沢里山の会の活動が20周年を迎えたことに深く感謝申し上げます。

20年前、遊休地となった谷津田を再生する話を聞いて驚きました。当時私は農業委員をしており、大規模都市開発で取り残された遊休農地の取り扱いに苦慮していました。これは水田の有効活用として大切なことだと判断し、関係者と調整し、参加協力した覚えがあります。

「田んぼの学校」では、毎年私が先生として田植えや稲刈りについて指導していますが、子供達の明るい笑顔は何物にも代えられないものがあります。里山の会の会報を読み返してみると、ボランティアや学校関係者などが協力して、多くの作業を行ってきた実績とともに、水田の有効活用の大切さが伝わってきます。会員の高齢化の問題もあり、いつまで継続できるか心配したこともあります。しかし新たに参加してくれる方もおり、ほとんどの方は農業について素人ですが、一生懸命熱心に取り組んでいただき、改めて感謝したいと思います。

また平成29年には「旭日双光章（農業振興功労）」受賞の栄誉を頂き、里山の皆さんにもお祝いをして頂きました。

先祖から受け継いだ田んぼを有効活用でき、地元の人間として農業委員として、取り組んで良かったと改めて思い返しています。

I.立沢里山の20年を振り返る

里山景観の保全と小学校教育支援

会員と市民ボランティア参加の活動推進



◎小学校体験学習支援の活動

・田植と稲刈りの体験学習



3校合同：大井
沢小、御所ヶ丘
小、松前台小

生活科の体験
学習（ささぶ
ねを体験）

おだかけ作り、
稲刈り前の準備
作業



授業を無
事終えて
一休み

小学校 4
年生の植
物観察の
様子



◎皆の記憶に残る上総掘りの様子



◎児童生徒の感謝感想文



「立沢里山の会」企画の活動、自己研鑽

◎里山祭りを開催

「野で遊ぶ、
野に学ぶ
野を食す」

活動5周年を記念
して開催

3小学校の案山子が
近隣の皆さんを出迎える



餅つきを体験する様子



里山祭りを終え記念撮影

◎第8回「全国田んぼの学校ツボ・ジ ュム」に参加 企画賞を受賞



発表する清野 修氏（当時副会長）

◎北守谷団地の夏祭りに出展



◎研修会、親睦会など開催 御前山ビオトープの視察



活動資金を支えた出店
焼きそば作りに打ち込
む初代鈴木会長と須賀
事務局



五浦旅行

里山活動の広がり

◎里山再生の一つとして竹林整備活動と炭焼き活動が加わる

茨城県自然博物館の炭窯焼き研修会に参加
野外施設の炭窯を借りて竹炭焼き活動



竹林が整備されスッキリと



採れた竹酢液、
竹炭、炭の置物は
夏祭りで販売



炭窯に準備した竹を入れる

◎市内の様々な里山活動団体が集まり連携交流のステージへ

里山ネットワークが発足、これに参加し、更に活動の幅が広がる



自然環境に親しむ講座の様子
生涯学習講座の一環として開催



◎里山ネットワーク企画の イベントに参加

1. 市民大学講座
2. ネットワーク参加団体の活動支援
3. 守谷市「ようこそ守谷へ」参加展示協力
4. 子育て支援団体の協力



1. 市民大学講座
市民大学里山コースの講師をする南哲朗氏

2. 高野やまゆりの里の整備に参加

立沢里山の自然をもっと身近に

3. 守谷市の新住民を歓迎する「ようこそ守谷へ」に参加協力

様々な団体のブースが設けられ新住民と交流



里山ネットワークブースに協力
子供ザリガニ釣りが大人気



常総総合体育館で開催されたに会場の様子

4. 子育て支援団体の協力

市内の家族の自然体験の場として紹介、受け入れ



そうめん流しを楽しむ



稲刈り体験

地域の子供会が山菜採り体験



竹林でタケノコ掘りを体験

◎突然の新型コロナ対応



あらゆるイベン
トを中止
田植え、稲刈り
などは会員が直
営で実施

活動を再開
田んぼの体験学習
は3校合同授業か
ら各校分散、グル
ープに分かれて実
施へ



「稲わら妖怪アマビエ」

コロナに負けるな！

◎新たな活動

マコモタケ栽培に挑戦

安全安心に楽しめる里山を目指して

◎里山再生保全は ゴミ拾いから。草刈り、散策路設置に汗を流す



当初のゴミ拾いの様子。ゴミ袋が道端にびっしり！



入口を決め木道が敷かれ、中を歩けるように



入口の案内看板が完成。
木道は住宅街につながって散策ルートに



一休み、道具を入れる倉庫も設置され、
これからの里山を考える。



田んぼの再生



まずは田んぼ 1 枚、三校合同田んぼ体験を
目指して2枚開田。大変な作業だった。

環境整備活動は力仕事も 継続・更新が大切



立沢里山の掲示板を道路沿いに設置
里山紹介、里山の楽しみ方、会員募集
立沢里山活動の情報発信



こんな仕掛けも（ツリーデッキ）



入口の階段はやはり修復が多い



時にはユンボ使って大改修



住宅側の入口階段工の整備も怠りなく



橋の交換後は風景も新たに



現在の立沢里山入口

里山新聞の発行は活動記録、会員が里山の自然を紹介した里山日記は豊かな自然観察の記録（図鑑）になっている。

2006/4/30

環境整備が進み案内板で里山紹介

2010年6月号
地域住民に参加を呼びかける

里山日記
第3号のタイトルは、「里山の木や草にも花の季節がやってきました。」(2006/4/16)

2014/3/30
守谷里山ネットワークが「もりや里山新聞」を発行。
参加した「立沢里山の会」の活動が

[illegible]

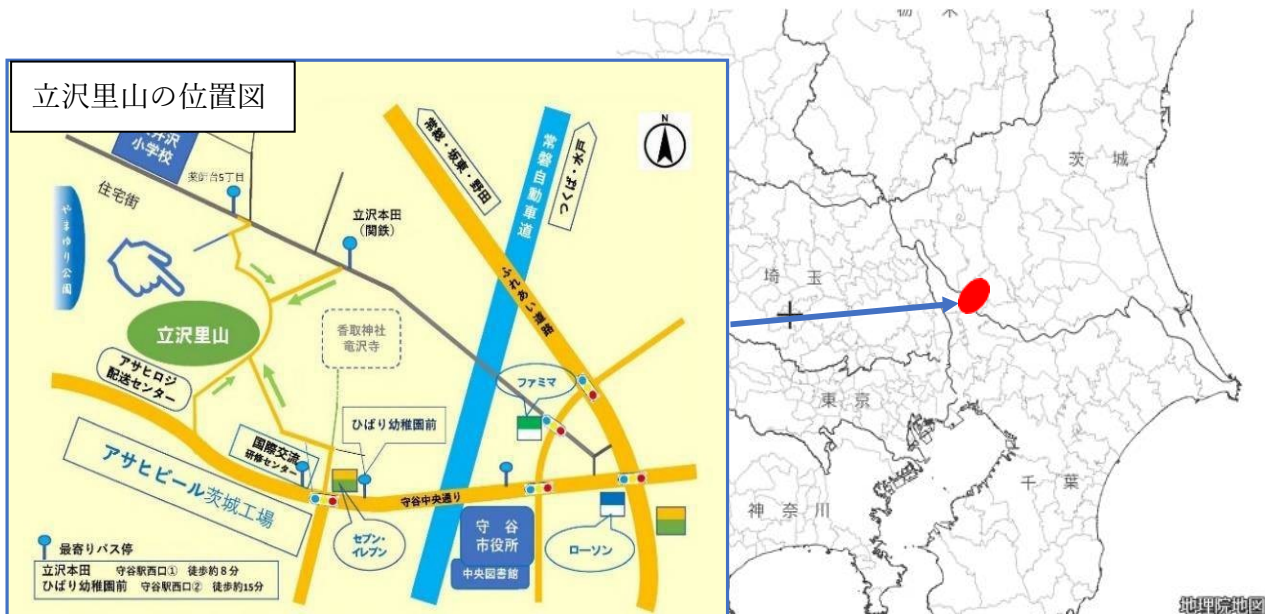
地域応援宣言活動状況の取材、執筆など協力

Ⅱ. 皆が楽しい立沢里山（立沢里山の紹介）



1. 立沢里山地域の紹介

立沢里山は、茨城県守谷市の市役所から徒歩15分ほどにある。守谷市は茨城県南部で利根川対岸は千葉県野田市に位置する。市役所の北西の薬師台5丁目と立沢本田、立沢向山に囲まれた谷津とその周辺で、住宅地に隣接しているとは思えないほど緑に囲まれ豊かな自然が広がっている。



守谷市は都心から40km圏内に位置し、「つくばTX」が平成17年に開通し、その沿線に大規模なニュータウン開発が行われ急速に都市化が進んだ。一方利根川、鬼怒川、小貝川の河畔林に囲まれた地形には古くからの農村集落が点在し、屋敷林の他、谷津田や斜面林が残った。

立沢里山は開発された北守谷団地と在来集落との接点に位置しており、通学路でもあり、住宅地と町役場、中央図書館、国際交流会館（ログハウス）などを結ぶ道路に面している。

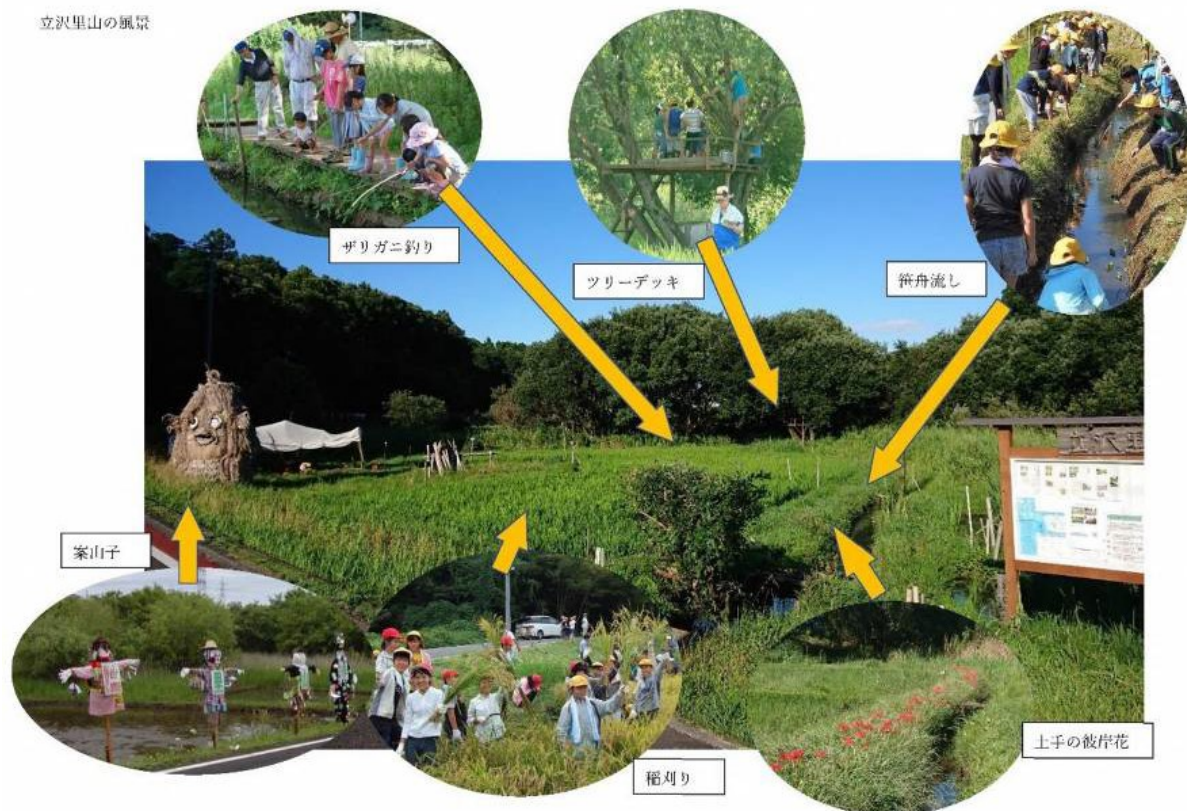
立沢谷津について

立沢谷津は北相馬台地が、海退（海面低下）に伴い竜のように複雑に浸食された谷部に海進（海面上昇）時に堆積物で埋められたものです。

台地上には農業集落や平地林、畑地ではタバコ栽培や養蚕が、谷底平野部では台地裾からの湧水を活用して古くから稲作が行われていました。平地林・斜面林や谷津田の周辺は、燃料としての薪や堆肥、竹材を使った道具づくり、山菜、薬草の採取など、人々の暮らしに欠かせない場所として利用され、人と自然との一体的な空間を形成していました。同時にそこは多様な生き物の生息の場でもありました。

里山再生活動によって、田んぼに稲が実り、小川沿いの土手もでき

かつての風景が戻りつつある立沢里山の風景



2. 戦後の暮らしの変化と里山の環境

里山は人々の暮らしのために自然を身近に活用しながら適正に管理されてきた二次的な自然環境である。しかし戦後、化石燃料の急増によって薪炭の価値が失われ、化学肥料によって落ち葉を堆肥として利用することもなくなり、雑木林、松林の管理もされなくなった。遠目にはのどかに見える風景も間伐や枝打ちがされずに放置されると下草も生えないような暗闇の森となってしまう。この台地がやがて住宅地になったが、一部台地周辺の斜面林が自然公園緑地として残され、かつての自然を垣間見ることが出来る。一方、利根川に近い農地は大規模に農地基盤整備が行われて優良農地となっているが、沢に入り込んだ谷津田は規模が小さく地盤条件が悪いため農業機械の導入が困難で、しだいに耕作が放棄されるようになった。農林業の変貌によって適正に管理されなくなった谷津周辺の森や田んぼはヨシ、柳などが生い茂り、中にはゴミや産業廃棄物が捨てられる状態となっていった。

人の手が入らなくなった森や田んぼは草木が茂り一見自然豊かに見えるが、放棄され森には日差しも入らず、市の花である山百合は消滅し、用水が入らない田んぼは自然生態系が変化して、かつて何処にでもみられたメダカやカエル、ホタルなどの生息が非常に困難になった。

3. 里山再生の取り組み

昭和40年代後半から始まった大規模都市開発により豊かな自然が失われてきた。その一方で残された自然を大切にしていこうとする意識が高まってきた。ニュータウン開発が一段落した平成になって、転入してきた新住民を始めとして、里山を身近に触れ合える貴重な自然としての評価が高まってきた。平成4年から5カ年間にわたり、「自然調査会（団長 五木田悦郎先生）」が組織され、植物、昆虫、鳥類の3分野について市全域にわたる自然調査が行われ「もりやの自然 誌」としてまとめられた。報告書には良く自然環境が残され、散策、観察会などに適した区域を16か所取り上げており、その一つが立沢地区である。



自然調査会報告書
立沢里山地区は報告書の16の観察コースの一つ



立沢里山は、通学路や生活道路に面しており、都市開発に伴い多くの人が通る反面、捨てられた大量のゴミによる環境悪化が深刻な状況となってきた。このような地域の環境を再生するために里山活動が市民ボランティアにより取り組まれるようになった。ゴミを回収し、田んぼの再生などにより、子供達の環境学習や市民の憩いの場として活用する取り組みが行われてきた。

4. 立沢里山の会の年間活動について

当初の活動は、田んぼの再生を目指し、環境整備（ゴミ拾い、草刈り）、用水路の整備から始まり、会員を中心として、近隣の市民ボランティアを募集して里山再生活動を開始した。

整備後は、小学校体験学習の場として田んぼの環境管理作業を行い、竹林の環境整備活動も始まった。守谷里山ネットワークの設立に伴い、そのイベントの協力、更に「立沢里山」で新たな活動を試みる団体の支援などを行い、現在は幅広い活動を行っている。

次表が近年の年間活動状況で、会員の入会については随時行っている。

*「何か地域で活動してみたい/自然と関わりのある活動してみたい/子供たちの遊び場を作りたい/みんなで楽しく汗をかいてみたい。」

そんな思いをお持ちの方　一緒に活動してみませんか

立沢里山の会 年間活動予定（令和3年までの活動）

	授業支援	立沢里山の会	活動内容	活動団体
1月		竹林整備		会員
2月		竹炭焼き準備		会員
3月		里山整備、炭焼き		会員
4月	田植準備（シロカキ等）	窯出し	マコモ植付、山菜採り	会員、地域の子供会、ネイチャーライフ等
5月	田植え			小学校、会員
6月	さつま芋植付け		ようこそ守谷へ	小学校、会員、守谷里山ネット、有機農園クラブ
7月	田んぼ草取り			会員
8月		北守谷夏祭り出店	夏休み自然体験 そーめん流し	会員、地域子供会、守谷里山ネット、子育てネット等
9月	稲刈り、脱穀、精米			小学校、会員
10月	さつま芋収穫と自然観察		マコモ収穫	小学校、会員、ネイチャーライフ、有機
11月		里山整備		会員
12月		総会、竹林整備		会員

〇里山の楽しみ方、遊び方について

整備された立沢里山に、多くの方に来て楽しんで頂きたいと願っている。そこでいくつかのルールを知り、守っていただくことが大切と思い、それをまとめて掲示板、パンフレットなどに記載している。

「守谷さとやまマップ」より

里山を楽しむ心得

1. 里山は、そのほとんどが私有地です。屋敷はもちろん、田畑や森にも所有者がいます。勝手に入ったりのぞいたりせず、挨拶して許可を得てから入りましょう。里山の会など、特定の団体が管理している場所は、設置された看板などに書かれた注意をよく読んで、ルールを守って楽しんでください。
2. 里山は身近でも自然です。ハチや毒グモ、マムシ、池や沼の深みなど、危険な場所や生き物もあるので、十分に注意して、自己責任で楽しんでください。服装は歩きやすいもので、安全な靴、帽子があるといいでしょう。
3. 里山は生き物が生活する大切なおうちです。植物や虫、鳥などをむやみに傷つけたり、勝手に持って帰ったりしないでください。外来種や園芸種など、もともとなかった植物やペット、観賞用の魚などを持ち込んだり、捨てたりしないでください。
4. 子どもは一人では行かず、保護者の方やお友達と一緒に行きましょう。困った時は、まわりにいる大人の人に助けを求めましょう。

立沢里山の会のパンフレットには

次の注意事項もある。

- 1) 魚などをとつても構いませんが、地域にもともしなかった園芸植物や観賞用の魚・虫などの持ち込み・放置はしないでください。
- 2) むやみに植物や動物を傷つけたり、水位調整用の板などをいじらないでください。

自分の責任で自由に遊ぶ

里山は安全に楽しめるようにボランティアで管理・整備していますが、予期しない危険性もあります。

自分の責任で良く考え、皆が協力することが大切です。

そうしないと禁止事項ばかりが多くなり子供は自由に遊ぶことができません。

Ⅲ. 里山は自然の宝箱 (立沢里山のいきもの)

湿地の植物、水辺・水中の生き物たち、周辺の草木と生物、野鳥

立沢里山の最大の特徴は谷津田にあり、湿地に育つ植物をはじめとして水辺に集まる多様な生き物を見ることができる。そして 谷津田を囲む斜面林と農村地区、更に近くを流れる各河川敷の緑が更に環境を豊かにしている。

1. 湿地の植物

早春に田んぼの周辺の水辺ではセリ摘みの姿が見られた。小川の流れる目に向けるとカワモズクの仲間が見られ、(2020 年現在はコンクリート張り用水路に生息) コケ植物のヤナギゴケも見られる。

田んぼの周りの湿地は、ヨシ、ガマ、マコモ、オギが繁茂している。田植え近くになると、湿地を好む、タガラシ、タネツケバナ、ムラサキサギゴケ、オオジシバリ、ツボスミレ(ニョイスミレ) などが見られる。池では菖蒲湯で使わ



タネツケバナ
(苗代の準備をする頃
花が咲く意味)



ミソソバ
(溝蕎麦)

れるショウブが伸び始め、小川沿いにイボタノキの白い花が咲き、

池の一角にタコノアシ、アギナシが見られる。田植えが終わり、少し苗が落ち着くころには田んぼでコナギが勢いを増す。夏から初秋にはセリ、ミゾソバ、タコノアシ、そしてコナギの花が咲き、アメリカセンダングサの群落が湧水に沿って見られる。(※ タコノアシ、アギナシ：準絶滅危惧種、環境省 2012 年)



ムラサキサギゴケ
(花言葉 あなたを待っています)



タガラシ
(噛むと辛い、有毒植物)



タコノアシ

(秋に赤味をおびます)



アギナシ

(オモダカの仲間です)



コナギ

(きれいな花ですが
稲作には大変困り
ものです)



セリ

(キアゲハの食草)

2.水辺・水中の生き物たち

里山には2本の小川が合流し池もあり、メダカ、モツゴ、タイリクバラタナゴなどが見られる。そしてミズカマキリ、マツモムシ、ハイイロゲンゴウ、ヤゴなども網に入る。

田んぼには、カエル、オタマジャクシ、ドジョウ、アメリカザリガニ、ヌマエビの仲間もいて、子供たちはこれらを狙うが、サギなど鳥たちも狙っている。

初夏には、シオカラトンボ、オオシオカラトンボ、シオヤトンボなど多くのトンボが見られる。青い胴体がオス、黄色の胴体はメスである。赤とんぼの仲間のノシメトンボも多く見られる。池にはギンヤンマが育ち、小川にはオニヤンマが育つ。オニヤンマは成虫になるまで約5年かかる。オニヤンマの羽化が見られるのは、5年以上住みよい環境であった事が伺える。田んぼ周辺の花にチョウを始め、多くの昆虫が集まるので トンボの絶好の狩場となり、そして、産卵の場となる。



オニヤンマ
(ヤゴで5年間すごす)

ヘイケボタルが数カ所で生息している。保全活動は近隣の方々の協力があり、街灯は一部ナトリウムランプに交換され、隣接する会社の駐車場の照明には遮光板がつけられ、夜の暗い環境を整えてきたが、今は街の明かりが降り注ぐようになり、今後は街の明かりの対策に取り組むことが望まれる。それから立沢にはクロマドボタルもいて幼虫が強い光を発する。

寒い時期、2月に入るとアカガエルが田や池に産卵する。冬でも水が多く残っているためである。そして、アマガエルは春暖かくなると産卵する。それから シュレーゲルアオガエルの合唱は田植えが終わるころに聞こえる。



アマガエル



オオシオカラトンボ

(上がオス、下がメス)



ノシメトンボ

(赤トンボの仲間)



アメリカザリガニ



ヘイケボタルの飛翔の軌跡
(長時間露光による撮影)

3.周辺の草木と生物

立沢里山の湿地にハンノキ、マルバヤナギがあり、斜面にはドングリの木、クヌギやコナラ、カシ類が見られる。そして 台地に上がると、農家の周りには 梅林、杉林、竹林などが見られる。

春を迎える里山に白いコブシの花が咲き、次には白い花のエゴノキの白い花が見られる。コナラやクヌギの花も目立たないが満開になる。立沢里山の入口にクワの木があり、実を楽しむことが出来る。そして茨城県の由来となったノイバラがある。6 月に入ると守谷市の花、ヤマユリが



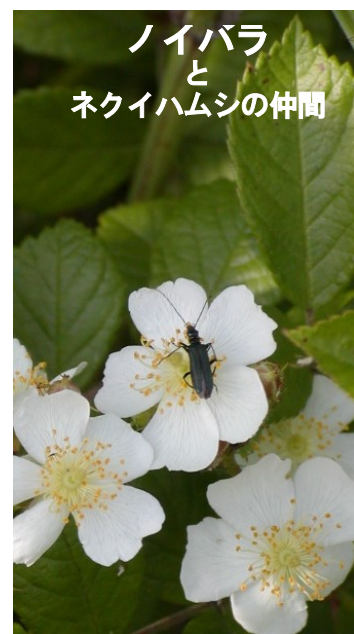
強い香りと共に見頃を迎える。そして、土手、林縁部では春から様々な植物が見られる。フデリンドウ、カラスビシャク、タチツボスミレ、ノアザミ、アメリカフウロ、アキノタムラソウ、ヤクシソウ、サクラタデ、ツルボ、そして つる性のクズ、センニンソウ、ヒルガオ、スイカズラ、ヘクソカズラなど。秋も深まると、セイタカアワダチソウの黄色い花が目立ってくる。

5 月ごろ春の妖精 (ゼフィルス的一种) と呼ばれるミドリシジミを見かける。湿地の一角にあるハンノキ林で繁殖する。クヌギ、コナラではゼフィ

スのミズイロオナガが現れる。

田植えが終わり、少し苗が落ち着いた頃、水面を白いものが浮いている。晴れた日に風に乗って雪のように白いものが舞い始める。柳絮 (りゅうじょ) である。正体はマルバヤナギの種が熟して綿毛となって飛び始めたのである。このヤナギ林で産卵、成長したコムラサキは幼虫越冬し、成虫になっ

て現れる。



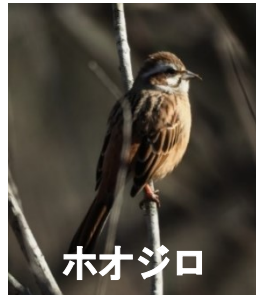
4.野鳥

春先の陽気の良い日などには 守谷市の鳥、「チョットコイ・チョットコイ」のコジュケイの声が聞こえる。ときには「ケーーン」とキジの声が聞こえる。時々道路でキジの歩く姿を見かる。

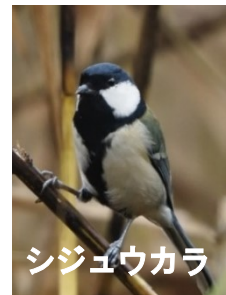
様々な野鳥が 里山に餌、獲物を求めて飛来する。イネの仲間の種、果実、木の実や、トンボ、アブ、カ等の昆虫を求めてくるもの、水中の魚、水辺の生き物を狙うものなどが多く訪れる。そして、タカの仲間はこれらに集まる鳥を狙ってやってくる。



キジのつがい



ホオジロ

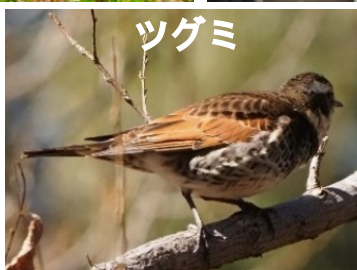


シジュウカラ



コジュケイのつがい

(守谷市の鳥)



ツグミ



メジロ



ジョウビタキ

そして里山の自然は巣作りの材料を集める場所でもある。庭先の木々でも見られるシジュウカラ、ヒヨドリ、ツグミはもちろん訪れる。周辺の雑木林、斜面林ではコゲラが木をつつく音が響く。晩秋から春先にかけてメジロのさえずりが聞こえる。

田んぼには、アメリカザリガニ、カエルなどを求めてサギの仲間が長く留まっている。その姿を見なくなった時は、大きな獲物は食べつくしたのだろう。

カエルを求めてヘビ類が集まり、それを狙ってタカが飛来する。

小さなエナガは巣作りにクモの糸を求めてくる。秋が近づくと「キイキイキイ」モズの鋭い声で高鳴きを耳にする。

現代、都市化が進む中では、どこかで住まいを追われた野鳥がここに集まること



カワセミ

(溪流の宝石と呼ばれる)



アオサギ

(翼を開くと約 160 cm)



(不思議な習性：はやにえ)

もあり、観察の継続は大切である。

ツボスミレ
タチツボスミレ
フデリンドウ
シロツメグサ
ムラサキツメクサ
ヘビイチゴ
ミツバツチグサ
ナズナ
ノミノフスマ
ハハコグサ
ウシハコベ
センニンソウ
カントウヨメナ
アキノタムラソウ
シロヤマギク
ノアザミ
スイカズラ
ミズヒキ
ハエドクソウ
ツユクサ
カナムグラ、ヘクソカズラ
ヤブカラシ、クズ、ヒルガオ
オオオナモミ
タケニグサ
ヤクシソウ
オニタビラコ
スズメノテッポウ
スズメノヤリ
タカトウダイ
メマツヨイグサ
ツルボ

オトギリソウ
カラスビシャク
ドクダミ
ゲンノショウコ
センブリ
ヨモギ

ヤマユリ
サクラ
コブシ
(クワ)
スギ
(マツ)
シノダケ
マダケ
モウソウチク
ササ
クヌギ
コナラ
シラカシ
ケヤキ
フキ
ワラビ
カキ
チャノキ
ウメ

ハルシメジ
ハタケシメジ
タマゴタケ
ツルタケ
ヒラタケ

コジュケイ、キジ
カワセミ
ハクセキレイ、ジョウビタキ
エナガ、ウグイス、メジロ、モズ
シジュウカラ、ヒヨドリ
カラス
アオサギ
コサギ、チュウサギ
オオタカ、サシバ

鳥

カナヘビ

アメリカザリガニ
メダカ

モツゴ、タイリクバラタナゴ
ヌマエビの仲間・ヨコエビの仲間

イシガメ
アカガエル・アマガエル
シュレーゲルアオガエル

ギンイチモンジセセリ
イチモンジセセリ、ダイミョウセセリ
キタテハ、アカタテハ、コムラサキ
ツマグロヒョウモン
ウラナシジミ
ムラサキシジミ
ツバメシジミ
ヤマトシジミ
ベニシジミ
アゲハ・キアゲハ
モンシロチョウ
スジグロシロチョウ
キタキチョウ
オオミズアオ
フクラスズメ(幼虫)
ホシシヤク

蝶・蛾

トンボ

オニヤンマ・ギンヤンマ
シオカラトンボ
オオシオカラトンボ
シオヤトンボ
ノシメトンボ

ミズカマキリ、マツモムシ
ハイイロゲンゴロウ
オオカマキリ・ナナフシ、アブラゼミ

野鳥や昆虫など

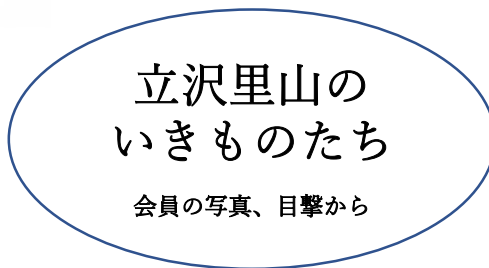
ヘイケボタル、クロマダボタル
ゴマダラカミキリ
テントウムシ
ハッカハムシ・カメノコテントウ
ネクイハムシの仲間
クヌギカメムシ

助ける
受粉を

コアオハナムグリ
カミキリモドキの仲間
フタモンアシナガバチ
モモトコバネカミキリ
ヒメヒラタアブ、ホソヒラタアブ

ナガコガネグモハマキフクログモ
ジョロウグモ、オニグモ

農家のまわり(植栽と保全)



立沢里山の
いきものたち

会員の写真、目撃から

セイヨウタンポポ
カラスノエンドウ
ハルジオン
ヒメジオン
ホトケノザ
ムラサキサギゴケ
ヒメオドリコソウ

畔や道沿には

田んぼと水辺の植物

オオイヌノフグリ
オランダミナグサ
チドメグサ
オオバコ
カラムシ
イヌタデ、サクラタデ
チョウジタデ
エノコログサ
タチイヌノフグリ
ヤノネグサ
ケキツネノボタン
オオジシバリ
サルトリイバラ
セイヨウフウロ
オッタチカタバミ
セイタカアワダチソウ
アレチヌスビトハギ
シラヤマギク

低木

ゴンズイ
コムラサキ
シロシキバ
ヤマハギ
イボタノキ

タガラシ
コナギ
ショウブ
セリ
ミゾソバ
ヨシ
ガマ
マコモ

タコノアシ
アギナシ

アメリカセンダングサ

ヤナギゴケ(コケ植物)
イチヨウウキゴケ(コケ植物)
チャイロカワモズク(藻類)

マルバヤナギ
カワヤナギ

活動後植栽(コウホネ、コダイハス、キショウブ、ミズバショウ、アサザ、オランダガラシ、ロウバイ)

会員の写真から立沢里山の自然を追ってみました。華やかな春の記録、花に訪れる小さな昆虫たち。それ狙うもの。散策をするとよく見かける花々、実りの記録でした。このリストにありませんが、雑草と言われるイネ科や、コケ側物、ウメノキゴケなどの地衣も、もちろん田んぼ周辺、農家の庭先には見られます。

準絶滅危惧

維管束: アギナシ、タコノアシ

藻類: チャイロカワモズク

絶滅危惧II類

昆虫: ギンイチモンジセセリ*(2005)
魚類: ミナミメダカ

苔類: イチヨウウキゴケ*(2011)

*2021年は現在未確認

IV. 里山の自然と市民活動

1. 守谷の里山

首都圏最後の大規模都市開発と言われた常総ニュータウンが位置する守谷市は、「つくばTX」が開通し、その沿線は急速に都市化が進んでいる。

そんな中で、古くからの農村集落が点在し、屋敷林の他、都市開発で残された谷津田や斜面林には豊かな自然が残されていた。

高台の団地から少し降りた谷津田の小川で大勢の子供たちがタモやバケツを持って遊んでいた。近づいてみるとメダカやドジョウなどが沢山いて季節にはホタルも観察できるとのことだった。新興住宅地のすぐ傍にこのような場所がまだ残っていたことに感動した。

しかし、さらに近寄って子供たちの周辺をよく観察してみると大変なことになっていた。小川には空き缶、ガラスの破片が散乱し、廃液らしきものも流れている。都市開発により緑地が改廃減少しただけではなかった。農林業の変貌によって谷津の田んぼはかなりの耕作放棄され、アシ、柳などが生い茂り、中にはゴミや産業廃棄物が捨てられ最悪の状態となっていた。

遠目にはのどかに見える斜面林や屋敷林なども放置されると人を寄せ付けない暗い森となり、里山独自の稀少植物の絶滅をも招いてしまった。年配者に聞いてみると、ほんの十数年前までは市の花でもある「山百合」や「シュンラン」「カタクリ」などは身近な里山の何処にでも観られたが、今ではほとんどなくなってしまったとのことだった。

2. 市民参加による自然調査

平成になって、転入してきた新住民を始めとして、里山を身近に触れ合える貴重な自然としての評価が高まってきた。

平成4年から5カ年間にわたり、「自然調査会」が組織され植物、昆虫、鳥類の3分野について市全域にわたる自然調査が行われ「もりやの自然誌」としてまとめられた。

この調査の最大の特徴は、各分野の専門家だけで



里山で遊ぶ子供達

はなく、市民ボランティアを公募し市民参加による調査を行ったことである。そのため、社寺林、斜面林、並木などを始めとして広域の植生精密調査や移動する昆虫・鳥類の同時多数地点、長期の調査が可能となった。また、調査活動を通じて市民の環境意識が向上し、里山保全など多くのボランティア活動が自然発生的に取り組まれるようになった。



活動はゴミ拾いから・回収されたゴミの山

3. 立沢里山の会の発足

守谷市内では多くの団体が各地で里山活動に取り組んでいるが、「立沢里山」は最も大規模な北守谷団地に隣接した地域である。

(1) 立沢里山の会の創設

立沢里山はニュータウンと在来集落の接点に位置する谷津田と斜面林で、小学校と図書館や総合体育館との近道ともなっており、多くの子供たちが通るところであるが、沿道の耕作放棄された田んぼには雑草が伸び放題で大量のゴミ等が投棄され環境悪化が深刻な状況であった。

平成11年に守谷町より自然調査会へ立沢休耕田の活用について諮問があり、同調査会より活用案が答申された。また、立沢の区長からも活用依頼があり(現地は雑草が繁茂し、ゴミの不法投棄がひどく、通学する子ども達にとって危険な状況であった)、町として事業方針を決定し、地権者(約20人)への趣旨説明(戸別訪問)を行った。

翌平成12年、地権者への概要書配布及び協力依頼、用地の測量、町の生涯学習課によりボランティアの募集が行われ10名が応募した。12月2日、立沢の現地と役場の小会議室において、立沢休耕田ボランティア協力員会議が開催され、活動の目標を4項目、①タコノアシなど希少種植物の保護地域を設け繁殖を図ること。②ホタル、メダカなどを保護繁殖し、体験と観察の場とすること。③自然が果たしている役割を知り、その適正な管理方法を学ぶ場とすること。④部分的に体験型の水田耕作を行うこと。また、運営方法として公募による一般住民の自主的運営を基本とし、計画段階から住民の参加を積極的に促進することとした。

年末にボランティアとしての組織づくりをすることなどを取り決め、「立沢里山の会」が設立された。

（２） 田んぼの再生と上総掘り

翌年から市役所の休耕田活用事業の運営スタッフに応募した住民が中心となり、ボランティア活動で田んぼの再生に取り組むこととなった。

当初の数年間は一ひたすらゴミ拾いだだった。参加者は「守谷をきれいにしよう会」、一般ボランティア、役場の有志、立沢里山の会などの約 25 名で、収集した投棄ゴミの量は 1,680 kg、トラック何台ものゴミを除去し草刈りを行った。

平成 14 年、教育委員会から要望もあり、小学生の体験学習のため、里山に田んぼを復活させることを決議した。草むらとなっている湿地を整備し、田んぼの復活作業が始まった。そして、住民に呼びかけて実施した作業は年に 3 回、会員のみでは 3 回実施した。11 月、最終作業時に懇談会を兼ねて、田んぼの活用などを話し合った。

平成 15 年も主に柳の樹木を伐採し、徐々に田んぼを再生していったが上流が開発されてしまったので水源不足が問題だった。たまたま、地元農家に伝統技術である「上総掘り」の経験者がいたことから、さっそく「井戸掘り名人」の指導のもとに皆で取り組むことになった。地元新聞にも取り上げられ大勢の市民も見学に訪れた。資材はほとんど竹だけという素朴な手法であるが、10m も掘り進むときれいな水が見事に出てきて歓声が上がった。

同年、有志により初めての田植え、稲刈を行い、収穫祭(新米の試食)などを行った。



上総掘りの様子

（３） 田んぼの学校

平成 16 年、教育長、北守谷地区の 3 小学校長、農業委員会会長、当会の会長が集まり、全ての田んぼを体験学習用に提供することとした。

5 月に北守谷の 3 つの小学校(御所ヶ丘、松前台、大井沢)の 5 年生約 200 人が一堂に集まり、初めての合同田植えが賑やかに行われた。



初めての田植え

秋には同じく 3 つの小学校合同の稲刈りが行われ、この時新聞社 5 社が取材し各記事が掲載された。約 270 kg の収穫があり、1 校 1 俵を提供し、それぞれ収穫祭などに活用された。

最近では機械化によって地元農家の子供でも農作業を手伝うことは少ないので、参加する子供たちはほとんどが初体験で大騒ぎであった。田植えでは恐る恐る足を入れた瞬間は叫び声で、最初は全く作業にならない。

それでも徐々に慣れてきて泥だらけになっても楽しそう。目印のついた紐に沿って横一直線に並んで植えると、全員が終わらないと次の列に進めない。遅い子を手伝い間隔を調整しなければならぬことがわかってくる。まさしく隣近所や協調性を大切にする日本人気質を育てた原点と実感する。

五感（見る、聞く、触る、味わう、嗅ぐ）を使い皆で助け合う体験は忘れていた人間力をアップさせ、帰るときは皆の表情が明らかに変化している。

また田んぼの学校では不定期ではあるが、学校や地域の子供会、子育てグループなどからの要請を受けて、課外授業、自然観察会や魚とり等の自然体験などを受け入れてきた。笹舟教室は最近では大人でも作れる人が少なくなってきた、子供たちは大喜びで笹舟と一緒に小川沿いの土手道を走り廻っている。ホタルも生息しており、案内を頼まれることも多いが乱獲の恐れもあるので自粛している。

週末には多くの親子連れで賑わうようにな



田んぼの学校稲刈り

ってきたが、田んぼの学校に参加した子供の案内でやってくる家族が多いようだ。



「里山祭り」案山子の歓迎

(4) 知らないオジサンと里山祭り

ある日、草刈作業が一段落して一休みしていると、自転車で通りかかった子供たちが大声で挨拶していった。「珍しいね、ニュータウンの子供たちは知らない大人に声をかけてはいけな」と教えられていると思うけど」「いや、そうじゃないよ。おそらく以前に田んぼの学校で稲作体験に来た子供たちではないかな」「そうか、私たちは知らないオジサンではなかったのだ」

そんな話題から、小学5年生だけでなく地域皆に里山を知ってもらおうと「里山祭り」を開催することになった。

平成18年5月14日(日)、「野で遊ぶ・野に学ぶ・野を食す」をサブタイトルとして「里山祭り」を守谷市、守谷市教育委員会、守谷市農業委員会の後援により開催した。

当日は小学生がコンテストで手作りした案山子が立ち並んで来客者を迎えた。

野で遊ぶコーナーでは、水鉄砲・笹舟づくり、ザリガニ釣り、草笛教室など

野に学ぶコーナーでは、田植え体験、自然観察会(クイズラリー)など

野を食すコーナーでは、里山から採取したセリ、ヨモギ、桑の葉、山ウドなどの野草天ぷら試食、餅つき、山菜ソバ、里山田んぼのオニギリなどを楽しんでもらった。

想定を上回る多くの参加者があり、水鉄砲の竹や食材が足りなくなったが、すぐさま里山に



野を食す「餅つき」

分け入り青竹や山菜を調達することができた。

多くの親子で賑わい「子供を野に呼び戻す」企画は大成功だった。

(5) 里山は冒険の入口

立沢里山の近くに観光パンフレットにも掲載される立派な都市公園がある。休日には乳幼児を連れた親子が多く訪れくつろいでいる。しかし、公園は予定調和的で安心できる空間ではあるが直に飽きてしまう。子供は小学生くらいになると物足りなくなってきた、友達と集団をつくり、自然と触れ合い、冒険して遊ぶことに興味を持ってくる。

最近では自宅でゲームに熱中することが多いかもしれないが、実はかなりの子供たちが友達と連れ立って里山に遊びにきている。そこには蛇や蜘蛛などもいて危険な場所でもあるが、里山に分け入ったとき、魚とりをするときワクワク、ドキドキする緊張感がある。毎日来てても何かが変化して昨日と違う感動がある。都市公園では立ち入り禁止が多く、魚とりや施設に手を加えると、公共物破損や窃盗になりかねない。里山は民地で自己責任が基本、危険もあるが自由な空間であり、とった魚は持ち帰ってもいいが、外から持ち込まないようにという皆が驚いている。

ある日、池の中島に渡ろうとしたのか、木材が持ち込まれた形跡があった。しかし、材料の長さが少し短くて残念ながらあきらめたようだ。そこで土手の補修作業のついでに中間地点に杭を打って落ちて大丈夫なように水位を少し下げておいた。翌週、来てみると見事に橋がかけられており、中島には沢山の足跡が残されていた。ほんの小さな中島であるが子供達の満足げな表情が目に見えてきた。



小川で笹舟流し

(6) 善意の侵入者

定例の草刈り作業で集合すると、皆で何か真剣に話し合っている。誰かが水路沿いにかなり大量のパンジーを植えていたらしく自然生態系への影響が懸念された。「園芸種なので排除すべき」「大

勢の子供達が来て遊んでいるので、花で飾ってあげたいという善意だろう」「在来種ではないが、庭には沢山あるじゃないか」「今すぐ何か不都合があるわけではない」などなど、いろんな意見が出た。実は前月にも植栽されていて、気のついた者が抜き取ったが、今度は数倍に増えて植えられており、植栽者の並々なぬ熱意と確固たる意志を感じた。結局地球温暖化と同じで身近なことが大切と引き抜くことにした。



自然観察会

また、稲の脱穀作業をしている最中に、親子連れが車で来て何やら籠を持って小川に入り、すぐに出て行った。不審に思っ行ってみると甲羅が30cmもある大きなミシシippアカミガメが放置されていた。これだけ大きいと単純に駆除とはいかないが、幸い近くの県立自然博物館に引き取ってもらった。さらに、メダカの中に赤いヒメダカが目立ってきている。

いずれも、ペットや観賞用に飼っていたものを放置したもので飼主の責任放棄と思われるが、「生き物がかわいそう」という気持ちはわからないでもない。善意の側面もあるので看板や里山新聞などにおいて周知徹底を図ることとした。

その後の里山活動の実践経験から園芸種等はほとんど問題とならないことがわかった。人の都合で改良された園芸種や観賞用の動植物は人の手をかけ続けなければ生きていけない。管理不良の我が里山の畦道ではパンジーなど数か月もせずして逞しい在来の野草に駆逐される。保護色を失い突進力の小さいヒメダカや金魚は野鳥の恰好なエサで数日もかからず消滅してしまう。里山



子供は虫とりに夢中

の自然生態系は甘くない。

子供たちが帰った田んぼは元の静寂に戻るが、しばらくすると、どこからともなくカエルが鳴き始め、キジの親子も戻ってくる。従来から棲んでいたキジの親子が、分家したのか二家族に増えた。在来種も頑張っている。

(7) 孟宗竹の暴走と炭焼き

日本の原風景ともいえる竹林だが、孟宗竹は仏教と一緒に大陸から入ってきた立派な移入種である。千年以上日本人に大事にされ適正に管理されて日本の風土に適應してきた。しかし戦後は燃料や生活用具としてほとんど使われなくなり竹林は放置された。その結果、全国的に竹林の暴走が環境保全上の問題となっている。

里山を整備すると大量の竹材がたまってくるが、法的に野焼きは禁止されており、その処理が難しい。

「炭にすればいいのではないか」、「いや、ニュータウンの真ん中で炭焼きなどできるわけがない」と酒を飲む度（だけ）に熱い議論をしてきた。

そんな時に近くの茨城県立自然博物館で炭窯製作セミナーが開催されることになった。まさしく我々のための企画ではないかと大勢で参加し、約半年間をかけて立派な炭窯が完成し「博楽玄窯」と命名された。

さっそく炭焼きに挑戦した。数か月かけて里山から竹の切り出し、乾燥、定尺切断、小割、節取り、結束等と作業を進め、いよいよ火入れの段取りとなった。皆初めての経験だが、火を囲みながら口だけは専門家気取りで忙しい。火止めまで竹酢液を採りながら交替で見守るが、この作業で実感したことは定型がないこと。手作りの炭窯には個性があり、投入する材料や当日の天気によっても火の勢い、窯の温度、煙の色が時々刻々変化し、かつこよく言えば窯と対話しながら進めるしかない。



自然博物館で竹炭焼き 取り出し中

完全に閉塞してから温度が下がるまで数週間放置し、皆の期待と不安の中で窯を開けた。初めての割には金属音のかなり立派な竹炭が出てきて皆大満足だった。

ただ、炭はかつてのように燃料として使われることはあまりなく、今度は焼いた炭の処理方法が大きな課題だった。

竹炭は土壌改良、水質浄化、脱臭に、竹酢液は虫よけなどに効果が知られている。

そこで竹の他に栗や松の実なども焼き、炭アートを作成し、竹炭や竹酢液と抱き合わせにして地域の夏祭りで販売したところ好評だった。特に「モミジバフウ」の実に目玉をつけた「ま

っくろくろすけ」が子供の注目を集めた。



「まっくろくろすけ」と竹酢液



(8) 里山の放射能騒動（東日本大震災）

平成 23 年の東日本大震災に伴う放射能は遠く離れた守谷市内においても局部的ではあったが高濃度地区が出てきて大きな問題となっていた。

そんな中で、立沢里山周辺は問題ないと言われてはいたが、田んぼの学校など子供の屋外活動は危険ではないかとの意見が出てきた。

子供の健康を心配する気持ちはよく理解できるし、一方で農作物の風評被害についても深刻な話題になっており、里山活動は双方に密接に関係していることから真剣に議論した。大切なことは科学的な根拠に基づいた判断が必要ではないかということで、市役所から放射線測定器を借用して調査した。

その結果、田んぼはシロカキで上下攪拌され泥水と一緒に流出したりするためか、むしろ周



放射能測定（ガイガーカウンター）

辺より低い数値であった。

基準値内ではあったが小川の澱みなどが落ち葉や泥が堆積するので比較的高い数値を示していたが、梅雨期の何度かの増水により、かなり下がってきた。そのため、田んぼの学校の田植えは、関係機関と調整のうえ予定通り実施することとした。

タイミングとしては炭焼きのために伐採して屋外保管していた竹材が心配だったが、竹林は上方の葉が繁っており、林床にはあまり影響がないようだった。もちろん、葉が落ちてきて積み重なった時期が心配なため、数年間はタケノコ等の山菜とりは取りやめとした。

(9) 悪戦苦闘の基盤整備

ア、道路沿いの田んぼを順次再生

立沢里山の谷津田は湿田で基盤整備がされず地盤が悪いために大型機械は入れないことなども、そもそも耕作放棄された要因の一つと考えられた。シロカキの小型耕運機も入れない場所、田植えなど小さな子供の膝までぬかるような大変な場所があることは今もかわりない。田んぼの土から昔足場とした丸太が出てくることもある。

かなり条件の悪い田んぼについては不耕起栽培でシロカキもせずに田植えをしたり、除外してマコモを植えるなどしてみると、メダカやカエル、トンボ等が急激に増えてきて驚きだった。

当初の田んぼは地域の3小学校のために3枚だけだった。道路沿いの草むらはゴミが捨てられやすく、ゴミ不法投棄禁止の看板を設置したが捨てやすい場所を案内しているようなものだった。未使用の空き地状態と思われることも原因と考え、道路沿いを順次田んぼに再生したところ不法投棄は減ってきた。

田んぼにできない沿道についても子供たちの観察体験用の野菜や山菜畑として整備した。里山へ通じる道路周辺についても、後日、近傍住宅地の有志が沿道の草を刈り、池を整備し立派な花畑に改良していただき、周辺を含めてかなり景観がよくなり感謝している。

イ、水利施設

上総堀の井戸はポンプアップのために運転時は人が張り付き燃料代もかかることから、通常の農業用水は小川を堰上げて取水することとした。しかし堰上げ施設が当初は土壌積みだったので、大雨の度に崩壊し維持補修が大変だった。

そこで会員一同が力を併せ、木杭を打ち込み魚道付きの角落とし取水堰に、水路も整備し水位調整パイプを設置するなど手を入れたお陰で水利施設はかなり立派になり、水管理は容易になった。併せて小川も浚渫し、草刈りなども熱心に行った

ことから、全体の景観も里山らしくなったと皆が満足そうだった。

上総堀の井戸水は干ばつ時の対応としているが、水質試験結果も飲用可能とのお墨付きをもらった。農機具や手足洗い、夏休みのプール等としても活用されている。



池の浚渫作業

ウ、池と木道

里山の谷津田を横断できるように木道を整備した。土地にはあまり手を入れないことを基本としていたので当初は地面に据え置きしただけだった。これではアリに餌をやっているようなもので、すぐに腐ってきて補修が大変な状況となった。残った材料を再利用しながら補修を繰り返したが初代の木道は数年で跡形もなく消えた。

そこで、新しい材料を購入して木道を改築することとした。交流のあった県北の御前山から間伐材を譲り受けて杭として地上げし、アサヒビール・エコ基金で購入した板材を炭焼きで出てくる竹酢液に浸して防腐剤とし、木道の改築作業を進めた。

池と小川の横断部までは改築したが、その先の湿地横断部は延長が長くて足場が悪く、経費、労力的に困難と判断して廃止し、川沿いの土手道に路線変更した。重機を使い畔を盛り土して歩けるように改良した。年数回の草刈りが必要となり、これまた大変な作業となった。期せずして掘った跡がせせらぎ水路となり、尾瀬沼のような景観が出来上がった。

土手道整備と併せて重機を活用して池も浚渫した。かつて借り受けた重機が埋没するという大失敗の経験もある作業で緊張した。

昔は谷津田の深い場所を養魚池としていたらしく、橋設置の際に橋脚杭を打ち込んだところ3m以上あり、危険箇所として一部埋め立てた。

ヘドロは内部生産されるようで、いくら浚渫しても埋まってしまう。水質浄化のために竹炭を埋設設置してみたが効果あったかは不明である。

スイレン、コウホネ、キシノウエ、アサザ、

タコノアシなどで賑わい、子供達にはザリガニ釣りのメッカとなった。

エ、丸太小屋とツリーデッキ設置

近くの香取神社の風倒木の処理を依頼され、同地森林クラブの間伐材なども頂き、大量の木材が手に入った。これらを掲示板、丸太小屋、ツリーデッキなど様々な里山整備に活用した。

特にツリーデッキは里山の安全管理の見張り台として田んぼを見晴らす樹上に製作したが、子供たちに好評だった。毎週お弁当持参で遊びに来るグループ、孫を連れのお爺ちゃんのリピータが増えてきた。

小川の合流地点でもあり、真夏でも日陰で涼しい風が流れてくる。我々も作業後の休憩所として一休みすることが多いが、しばらくすると野鳥が目先まで近づいてくることがある。

しかし、10年も経つと木が成長して少しずつ傾いてきて改築が必要となっている。夏場は小川に設置した水上パレットも大いに活用されているようだ。



ツリーデッキ

オ、畦道と広場の拡張整備

当初の田んぼの畔道は狭く、人がすれ違えない程度のもので、小川に面する畔はモグラやザリガニによる漏水が多く、毎週のように修復を繰り返さなければならなかった。

そこで一念発起して田んぼの土を盛って拡張し、たまたま手に入った彼岸花をモグラ除けに植栽した。秋の稲刈り後、彼岸花が咲く畦道を笹舟を追って走る子供たちを眺めて、絵本にあるような日本の原風景とご満悦だった。

田んぼの学校で子供たちの集合場所となる広場も地盤が悪く、いつも泥だらけとなる。イベントなども念頭に、地上げ、区画拡張し、竹炭と籾殻を活用して暗渠を整備した。

基盤整備は手をかけただけ成果はあるが、やってみないと分らない想定外の連続でもある。

草を刈り小川をきれいにすると、何故かホタルが減ってセイタカアワダチソウが増えてきた。排水条件が良くなり水位の低下を招いたことが原因のようだ。急遽、小川の途中に何箇所か木杭を打ってわざわざ人工的に洪水となるように手直しした。田んぼの土を大量に動かすと、土質や水の流れがかわり稲に生育ムラができることもある。

遊歩道を整備すると人が入りやすくなるのでゴミが捨てられたり、希少種の盗掘が増えたりする。

社会的な制約にぶつかることもある。簡単な草刈でもしかり、全国的に6月頃が環境美化月間として町内会などが総出で草刈りやゴミ拾いが行われるが、ヤマユリやオトギリソウにとっては開花直前の最悪なタイミングである。市街地では草刈をやめてくれというような要請はとてもできない。

野焼きなど法律もあって論外ということになり、かつては農林業によって自然に行われていたことがボランティア活動では難しいことが結構ある。地域の皆に里山についての正しい知識と幅広い理解が求められる。

(10) 立沢里山の会の宝物

田んぼの学校の後に子供達から送られてくる感想文や感謝状は会員として大いに励まされ参考になることが多い。この中から里山運営のアイディアをもらうこともある。これらが年々蓄積され、里山の会の宝物となっている。

また会員のご夫婦で毎日のように里山に通い、里山の動植物を取材して写真付きで解説した「里山日記」がホームページに連載された。これは里山の動植物の手作り図鑑でもあり、田んぼの学校のテキストとしても大きな財産となっている。

またホームページを開設し、会内外の情報共有や発信に役立っている。さらに「立沢里山新聞」を発刊し、いつの間にか30号を重ねることができた。現在は発展的に「もりや里山新聞」として守谷市全体を対象に継承されている。蓄積されてきた資料としては、出前授業のテキ



児童・生徒達の感謝感想文

スト、自然観察用のウォークラリークイズ、パンフレットなども里山の貴重な知的財産といえる。



立沢里山新聞

(11) 北守谷夏祭りと財政

里山活動は、管理のための機材、燃料に始まり、木道の補修改築、行事運営費など年間を通してかなりの経費が必要となる。

活動開始時期の数年は守谷市から「休耕田活用事業」の補助を受けていた。

その後、アサヒビール・エコ基金や(社)農村環境整備センターの企画賞支援金などもあったが継続性が課題だった。自主財源として長年支えてくれたのが北守谷団地の夏祭り出店売上金だった。

平成15年に資金作りのために、初めて北守谷の夏祭りに出店、フランクフルトの販売とバザーを実施したが、主に購入したのは会員で資金確保には至らなかった。平成16年4月「マイショップひろば」(市役所前)に里山産ショウブや会員の春の草花ポットを販売。8月には北守谷の夏祭りに出店、金魚すくいとバザーなどを実施したが、労多く効無しで資金確保には至らなかった。ボランティアで慣れない資金確保は甘くないと実感させられた。

平成17年、北守谷団地の夏祭りに出店し、焼きそばの販売を開始し、ようやく資金確保の目安がついた。これは野木崎地区の女性グループ「スマイル大野」の活躍によるもので、多い時には1,800食ものヤキソバが売れ、夕方には長い行列ができるほどだった。

男性陣は店の後ろでヤキ



土手の彼岸花と笹舟流し

ソバを焼きながら、缶ビールを飲むのが仕事で、毎年皆が楽しみにしている一大行事であった。

里山の会らしくパネル展示、里山マップの配布や、水槽で里山の小魚などの展示を行ったところ子供が群がってきて、最後にメダカを無料配布したこともある。

炭焼きで出てくる「竹酢液」や、竹炭・木の実でアートを手作りして販売した。竹酢液は市販の数分の一の価格としており農村部ならすぐ完売するはずだが、ニュータウンでは、そもそもこれは何ですかという反応が多く、もう少し工夫が必要と感じた。数年すると徐々にリピータが増えてきて大量に購入する人がいた。聞いてみると庭の虫除けのほかに猫や犬除けに効果があると思いかけぬ街中らしい活用方法に感心した。



北守谷団地夏祭り出店

4 市内里山団体の連携協力

(1) 自然環境に親しむ講座

市内には各地で里山活動に取り組んでいる数多くの団体がある。

平成20年に市の生涯学習講座を活用して「自然環境に親しむ講座」の開催を企画し、バスを使って市内各地で取り組まれている里山活動の現場視察や、有識者による連続講座、参加者間の意見交換などが行われた。その結果、里山活動といながら、その動機や目的、活動内容は地域によってかなり多様な形態となっており、様々な課題を抱えていることが解った。

ア、活動の動機・目的

- ①これ以上の大規模な開発に歯止めをかけ、自然を残したい
- ②残された自然こそ地域振興の資源であり、観光開発の目玉にしたい
- ③身近な自然や植物との触れ合いを楽しみ、子供達の環境教育の場として活用したい
- ④住みやすい地域づくりとして里山を再生整備し、耕作放棄地へのゴミ投棄など地域の環境悪化を防

ぎたい

⑤里山での共同作業を通じて、仲間をつくり生きがいを創造したい

イ、活動内容と特徴

活動の動機や目的が違えば、活動パターンも当然異なってくる。

①自然観察会や周辺保護など、あまり自然には手を出さない（見守り型）

②田んぼを再生して、子供たちの環境教育や遊び場として積極的に整備・活用（再生整備型）

③活動対象は森林、植物、昆虫、田んぼなど様々であり、中には個別の場所ではなく、山百合の会など特定の植物を対象とするもの（テーマ型）

参加者の構成も

①気のあった仲間だけで新規会員は募らない（仲良し型）

②常時開放して新旧住民の交流の場とする（交流型）

③自治会や婦人クラブなど既存のグループが一体として取り組む（街づくり型）パターンなど様々である。

ウ、共通する課題

いずれの団体も、外来種移入、技術・知識不足、メンバーの高齢化、人手不足、資金不足、地元調整など様々な課題を抱えている。特に、取り組みの歴史が浅いためにほとんどが初代のメンバーであり、今後世代交代の時期になってくると若者の参加など後継者の育成が重要と考えられる。



手作り掲示板

(2) 地主の理解

緑地として残されている箇所には民地も多い。耕作放棄水田は不在地主のケースもある。

特に、新住民が中心となって取り組む場合は最初の課題が土地所有者の理解をどうすれば得られるかということになる。

現在、市内で活動が活発に行われているフィールドは幸い地主の理解があつて順調に取

り組みが進んだ地域であり、中にはプロジェクト名に地主の名前を活用している例もある。

現在は円滑に運営されているが、地主の世代交代、不在地主の増加などによって将来どうなるか不確実で、契約更新や取り組み内容の変更をする際は特に顕在化するおそれがある。関係者に広報誌を定期的に配布して情報提供を行うことや活動へ一緒に参加してもらうことなども重要である。

また全てをボランティアに頼ることには限界がある。土地問題は利害調整や権利関係、土地利用規制などが複雑にからむ場合もあるので、事案によっては信頼性を担保するために行政が仲介し支援する仕組みをつくることも大切である。



守谷里山マップ（企画編集守谷里山ネット）

（３）里山人間模様

里山をめぐる生き物の中で最も多様性に富んでいるのは実は我々人間かもしれない。首都圏の大規模ニュータウンは、出身地が全国各地、日本の縮図であり移入種の集まりともいえる。世代、職歴や入会の動機なども様々で、まさしく昨日まで人生の全く違う人達が、里山というキーワードだけで出会ったことになる。

ボランティア活動は手当てをもらう仕事ではないので好きな作業を自由にやってもらうのが原則である。皆が草刈をやっているときに好きな写真撮影や魚とりなどをしてもいいこうにかまわないと説明している。

ところが、いずれの団体もメンバーの主力は戦後団塊の世代であるが、この世代は子供の頃から同世代が多く競争の中で生きてきたことから、企業戦士を辞めてもすぐには頭の切り替えができず、つい頑張りすぎてしまう傾向がある。まだまだ体力や行動力はあるが、若者のように無理はきかない。その結果、体調不良や怪我などからリタイアせざるを得ない事態も起きてくる。ただ、この世代は地方の出身者が多

く、それぞれ独自の里山の原風景や自然感を持っており、戦力として貴重な存在である。

稲刈りでも、出身地域によって、束ね方やハザ掛けの方法が違い、それだけでかなり賑やかな話題となる。

メンバーは、それぞれ特技を持ち、前述の井戸掘り名人の他、炭焼き名人、焼きソバ名人、イベント運営、山百合専門家、田んぼ博士、ビオトープ管理士、重機運転手、電気技師、新聞編集、写真家、市役所職員、市議員など様々である。特に酒の付き合いは熱心で、話題は実に豊富、最終的には酒飲み迷人が増えてしまい、グラウンドワークという「右手のスコップより左手の缶ビール」のほろが徐々に大きく重くなっていく。

（４）守谷里山ネットワークの立ち上げ

前述の「自然環境に親しむ講座」によって、里山や自然環境についての共通認識を育むとともに、各団体の成果や特徴、課題も明らかになってきた。

これらの活動が将来にわたって持続していくため、市民ネットワークにより情報交換や相互連携しながら、活動の充実と継続を図ることが重要である。それはまさしくビオトープネットワークと同じ考え方であり、特定の地域の取り組みが尻すぼみや崩壊（絶滅）の危機にあっても、ネットワークによる補完、あるいは代替機能が期待できる。更には、市内のネットワークとともに外部との交流や連携も大切である。このような趣旨から、同講座参加者が中心となり「守谷里山ネットワーク（代表清野修）が立ち上げられた。



転入家族歓迎会「ようこそ守谷へ」

（５）市民協働事業の推進

個別団体では取り組みにくい市全域を対象とした事項等について、里山ネットワークを中心に意見交換を行いながら取り組むこととなった。

ア、広報活動

転入者は豊かな自然環境に興味はあっても、どこへ行けばいいのかわからない。そこで広報活動がまず重要として、関係団体が協力して、駅前の

アワーズ守谷において、室内にミニ里山を復元し、子供達が里山体験をする「里山企画展」を実施した。ワークショップで子供に描いてもらった里山のイラストを活用して「守谷里山マップ」を作成した。

また年間の活動を「里山暦（カレンダー）」としてまとめ、併せて「もりや里山新聞」を発行した。

つくばTX開通後は駅周辺にマンションができて、東京や横浜等から若い家族の転入が増えてきた。その歓迎イベント「ようこそ守谷へ」の広報ブースでパネル、新聞・パンフ配布の他、小魚すくいやザリカニ釣りなどの触れ合いコーナーを設置したところ子供が離れなくなるほどに好評を得ている。

大サービスでイワシの大群のようにメダカを水槽に実物展示したところ、じっと見入っている大人がいた。「こんなに沢山だと、費用が大変だったでしょう。いくらかかりました。」「？これは今日近くの田んぼからとってきたものでいくらでもいますよ。」「えっ！私は自然のメダカを生まれて初めて見ました。」私としては「自然のメダカを生まれて初めて見たという大人を初めて見た。」驚きの出来事だった。季節にはホテルもありますのでお子さんと一緒に来てくださいと里山マップを手渡した。



竹林整備活動の中で門松制作設置

イ、市民大学里山コース

里山活動では自然生態系や生物多様性についての正しい知識や技術不足が原因で思わぬ失敗を招くことがよくある。そこで市民大学の仕組みを活用して年間にわたる連続講座やセミナーを開催した。他の講座が大学教授など外部有識者を中心としている中で、本講座は実際に里山活動している市民自らが講師を務める実践的なものとして特異な存在だった。

またヤマユリ自生地をバスで巡るツアーやグループ毎にテーマを決めた自主研究もあり、市内里山についてかなりの成果を集積し、人材育成にもなった。

正月飾り制作など実践的な企画も行い、市民活動支援センター玄関前に大きな門松を制作設置し、注連縄や花器なども手作りした。

ウ、市民協働事業

関東以西の森は長らく放置されると常緑樹が圧倒して下草も生えない暗がりとなり、市の花である「ヤマユリ」の自生地は危機的な状況となる。この課題に取り組む「山百合の会」は高齢者が多く間伐作業などは危険で難しい。

そこで里山ネットワークが仲介して協力者を呼びかけ、森林クラブなどチェーンソーワークが得意な団体の協力でヤマユリの里は見事によみがえることができた。市内の同地地区など間伐により日照条件が改善されて消えたはずのヤマユリが再生した森もでてきた。

上総堀について立沢里山の会は専門家（名人）がいて実績もあることから、みずき野地内の里山において「郷州里山の会」の井戸掘りに協力した。

子育て支援ネットワーク「ままもり」の幼児を含む親子自然体験を受け入れ、稲作体験や自然観察会を企画した。最も好評だったのは竹林から切り出した青竹に上総堀の冷たい地下水を流して手作りした「ソーメン流し」であった。ソーメンだけでなくミニトマト、ブドウ、輪切りのキュウリなどを流すと子供たちはころころと流れてくる食材に大騒ぎで、野菜の嫌いな子供もつい手を出すのでお母さんも大喜びだった。



親子自然体験（ソーメン流し）

（エ）外部交流事業

平成18年に立沢里山の会は、(社団法人)農村環境整備センター「田んぼの学校支援センター」における第8回「全国田んぼの学校」企画コンテストに入賞し、東日本地区発表会や宇都宮大学農学部で開催された「全国田んぼの学校フォーラム」に参加して活動実績を発表するなど他団体と交流することが出来た。

炭窯を設置した近傍の「茨城県自然博物館ミュージアムパーク」とは炭焼きの他、河川敷での野焼きイベントや企画展「SATOYAMA」

でのパネル展示などに参加協力している。

また県北山間部の「御前山ビオトープ」と相互訪問の交流や、間伐作業に参加し、間伐材を木道など里山整備の資材として活用している。

また、隣接するアサヒビール関東工場敷地内のビオトープ整備に協力するとともに、環境基金の支援金を受けた。

近傍地区ではお隣つくばみらい市の「古瀬の自然の会」、千葉県「野田自然共生ファーム」、県西の「五郎助山・丸山の里山を守る会」、潮来のマコモ栽培地なども視察（ネイチャーライフ）や勉強会で訪問している。



田んぼの学校旗（JARUS）

5. 新型コロナと里山

（1）新型コロナ問題と緊急対応

守谷市内では各地の里山で様々な取り組みがなされるようになったことから、幅広い市民が参加でき各団体の交流ができるイベントとして、関係団体が協働し再度「里山祭り」を実施することとなった。令和2年1月に守谷里山ネットを中心として実行委員会を立ち上げ、日程、企画、運営体制、予算などを決定し準備を進めた。

ところが、年始頃から話題となってきた新型コロナが全国的に蔓延してきて、ついに東京オリンピックが延期される事態になった。大勢の人が集まる行事は自粛することとなり「里山祭り」も中止とした。

竹林整備や炭焼きも取りやめとした。また市内の小学校で行われてきた稲作体験なども中止となり、立沢里山でも小学生の参加は取りやめた。

あらゆる社会活動が自粛される状況の中で、田んぼについては子供の参加はなくても会員の直営で例年通り米作りは実施した。

子供とはいえ200人以上で行っていた作業は大変であり、幸い市内の有機農園クラブやネイチャーライフ等の有志の応援を頂き、無事終了することができた。

秋には立派に収穫することができ、その使い

方を議論した。子供達は参加できなかったが、このような時期だからこそ難しい学校生活を送る子供達を励まそうと、エールをつけて各学校に収穫米を配布した。

大量の稲わらについても地域へのメッセージとして稲わらを積み上げて妖怪「アマビエ」を製作し「コロナに負けるな!」と掲示した。

大問題は新型コロナの影響で北守谷団地の夏祭りが中止となったことだった。毎年出店を出して、その収益金が貴重な里山財源となっており収入が皆無となったことだった。

窮余の策として山菜採り等イベントの参加費や、「エコーいばらき」「コープいばらき」等の民間支援金、北守谷まちづくり協議会との協働事業などに取り組んだ。

ボランティア活動とはいえ、里山は公益的な事業であり、長期的な継続性を確保するためにも何らかの財政支援について社会的な仕組みが必要だと実感した。



芋掘りと稲わらハロウィン

（2）里山から考えるコロナ問題

そもそも新型コロナは野生動物由来説もあり、人間と自然とのかかわり方に問題があったかもしれない、コロナ問題を人間社会への警告にとらえ、里山の視点から考えてみる必要がある。

パンデミックは人類の歴史上過去に何度も繰り返されており、開発による急激な環境破壊が要因の一つと考えられている。その度に人間社会を変革し生活様式を改めてきた。

今回は経済優先による環境破壊に加えて、急激な国際化による世界規模での人・物の移動、人口の過度な都市集中などが世界的なパンデミックを誘引し加速化させたのではないかと考える。

コロナ問題はワクチンが普及し、ただ終息すればいいというものではない。今こそ人間と自然との関係を見直す機会とする必要があり、接点でもある里山の視点は重要となっている。すでにリモート勤務、オンライン授業、働き方改革などが進み、地方回帰や自然と触れ合うライフスタイルが評価されてきており、社会のあり様を変革する好

機でもある。

コロナも生命体なので、種を持続するためには媒体である人間がいなくなるとは自分の方が困ったことになる。感染の波（盛衰）を何度も繰り返しながら変異し、感染率や重症化率を調整し人間と折り合いをつけ着地点を探しているようにも思える。最終的にはインフルエンザのように人間社会に定着するのではないかな。



上総掘りの湧水プール

（３）対応の基本方向

里山としても、新たな視点での安全対策や管理運営のあり方を検討した。

田んぼの学校では３密対策を基本として、従来３小学校の５年生２百数十名により合同実施していたものを各校分散で行うこととして再開することとした。マスク、検温、手洗い、作業手順など注意事項を周知させるために会員が事前に各学校に出向き出前授業を行った。もともと田んぼの作業は屋外で間隔をとって実施していたが、班分けして徹底すること。竹に穴をあけて内圧式の手洗い施設を設置、作業手順なども工夫もした。

しばらくして里山にはむしろ多様な人が来るようになっていくことに気が付いた。従来は週末に親子や子供達が来るのが普通だったが、何故か平日に日中に来る家族が増えてきた。中には毎日のように定期的時間帯にくる親子もいた。親は在宅勤務、学校はオンライン授業の状況で３密になりにくくて身近な里山への期待が大きくなってきたようだった。

そこで、高学年だけでなく低学年（２年生）を対象としたサツマイモ、自然観察・体験の受け入れも企画した。

さらに一般の家族に対しては、地域の子供会などを招待して山菜採り等を企画し、大勢の親子に参加していただき喜んでもらった。夏休みには、里山に湧水プール、ソーメン流し、バーベキューコーナーなどを常設し、家族や小グループに開放して自然体験や野遊びを楽しんでもらった。

社会全体が自粛ムードであったが、戻ってきた子供達の笑顔を見て、救われたのは我々だったような気がした。

６．今後に向けて

東京からつくばTXや高速道路で利根川を越える際に、対岸の守谷サービスエリア周辺に見える広大な森が利根川斜面林であり、立沢里山もその延長にある。昔話では日本武尊が東征の際に利根川を越え、「遙かなるや、森なるかな」と発したことが、常陸の国や守谷市の地名の語源ともいわれており、茨城県のグリーンゲート、原風景でもある。

守谷市はこの自然を守るために数年かけて斜面林の土地を取得した。しかし森は木が生えていけばいいというものではない。適正に管理されない森は常緑樹が圧倒して昼なお暗い人を寄せ付けない森に、時にはゴミ捨て場になってしまう。里山は活用され守られる二次的な自然である。多くの市民が触れ合い親しめる身近な里山として、市民参加により適正に管理・活用することが重要な課題となっている。

守谷市は 2008 年東洋新聞社の「全国都市住み良さランキング」において全国第１位となるなど、住みよさが高く評価されたが、多くの市民は実感しているわけではない。真に住みよい地域づくりのためにも、子供を含めて一人でも多くの市民に里山活動に参加していただき、豊かな自然環境と触れ合っていただきたい。

里山の会としては、コロナ問題を踏まえながら、今後とも幅広い市民が自由に自然と触れ合える場として、多様な取り組みを進めていきたいと考えている。（文責清野）



田んぼの稲わらで妖怪「アマビエ」製作
エール「コロナに負けるな！」

Ⅶ.20周年に寄せて

「立沢里山の会」活動20周年を祝して

立沢里山体験からの学び

御所ヶ丘小学校



守谷市教育委員会
教育長 町田 香

立沢里山の会が、活動20周年を迎えられたことを、心からお慶び申し上げます。また、会員の皆様には、日頃から本市の教育振興に深いご理解と格別のお力添えをいただいておりますことに、心から感謝とお礼を申し上げます。

皆様の活動拠点である立沢里山は、新しい住宅地と既存集落や市役所との間に位置した休耕田で、通学路に面した場所でもあります。しかしながら、活動いただく以前は、様々なゴミが散乱し、地域課題にも挙げられる中で、生涯学習課が窓口となり、環境保全を目的とした休耕田の有効活用策として「立沢休耕田活用事業ボランティア」を募集し、平成12年に「立沢里山の会」の活動がスタートしました。

以来、会員の皆様のご努力や地域の皆様のご協力により、周辺のゴミは一掃され、散策路の整備や水田の再生によって、野鳥がさえずる里山となり、春と秋の自然観察会のコースとしても活用することができました。

平成16年から開始された大井沢、御所ヶ丘、松前台の三小学校による合同稲作体験学習は、毎年、子どもたちが待ちわびる行事となり、貴重な体験学習として定着しています。子どもたちが、初めての体験で泥んこになりながら自然とふれあうことの楽しさや環境の大切さを学ぶことができ、豊かな感受性の育成につながっています。

今後も引き続き、学校との連携、ご協力をお願い申し上げるとともに、更なる会の充実・発展と会員の皆様のご健勝とご活躍をご祈念し、お祝いのことばといたします。

5年生が稲作体験（田植え、稲刈り）で例年お世話になっています。2年生は、生活科で里山の生き物と触れ合う活動をしています。令和4年は、2年生がさつまいもの苗植えやいも堀り体験をさせていただきました。

自然と触れ合いながら、里山の会の皆様に温かい御支援を賜り、毎年子供たちの楽しみな学びになっています。下記は子供たちの感想の一部です。

「ささのはでふねをつくりました。つぎにおたまじゃくしをつかまえました。かわいかったです。

（2年 大塚結衣）」

「いもをほったら、水とうぐらいの大きさでした。よるにふかしてたべました。おいしかったです。

（2年 山本圭史）」

「田植えをしたことがなかったので、心配になりましたが、友達といっしょにやってみると楽しい気分になりました。大変だったことはなえの植え方です。歩き方も難しかったです。田んぼからあがった時には、足が速くなったように感じました。

（5年 秋本悠葵）」

「農家でのお米を育てている人は、毎年田植えを行い、またその後の作業もやっているのは大変だと分かりました。お米を食べるのに茶わん1つ分に約4000粒も必要でした。私は農家の人にとっても感謝したいと思いました。田植えをまたやってみたいです。（5年 金子さくら）」

立沢里山の会の皆様に心より感謝申し上げます。



稲作体験を通して

松前台小学校

松前台小学校は平成元年に守谷町立御所ヶ丘小学校から分離し、松前台小学校として開校しました。平成16年度から、5年生は総合的な学習の時間の一環として「立沢里山の会」の皆様のご協力のもと、大野川源流の立沢地区において稲作体験を実施してきました。

立沢地区の田んぼには、メダカ・ザリガニなどの水辺の生き物、ヤマユリ、ムラサキシキブなどの植物が自生していて、この豊かな自然環境の中で、毎年、北守谷地区の3小学校は田植えや稲刈りなどの稲作体験を実施しています。

コロナ禍の中で、令和3年度には会の皆様に配慮いただき、3小学校それぞれでの分散開催となり、規模を縮小しながらも実施することができました。

田植えの体験前には、「立沢里山の会」の方を講師に迎え、全く田植えの経験のない子どもたちに細やかなご指導をいただきました。このような流れの中で、例年、有意義な活動が行われています。

体験活動は人づくりの「原点」です。直接自然や人・社会等に関わる活動を行うことにより、五感を通じて何かを感じ学ぶ取組を広く包含しています。稲作体験は、地域の方々と触れ合い支えられながら、生命や自然を大切にする心や他を思いやる優しさ、社会性、規範意識などを育てる好機と捉え、今後も継続して実施していきたいと考えています。



立沢里山の会 20 周年に寄せて

大井沢小学校

立沢里山の会が、20周年を迎えられましたことを、心からお祝い申し上げます。

立沢里山の会におかれましては、平成12年12月の設立以来、子ども達の思い出に残る稲作体験や里山の自然に親しむ機会を始め、学校の教育活動の充実に多大なるご尽力をいただいておりますことに心から感謝申し上げます。

令和3年度の稲作体験につきましては、新型コロナウイルス感染症対策のため、3校合同の田植え体験をそれぞれの学校で開催できるように御配慮いただきました。5年生の子ども達は、「立沢里山の会」の方に田植えの方法を教えていただきながら貴重な体験をすることができました。

また、町たんけんで里山の田んぼに出かけた2年生の子ども達は、メダカ・ザリガニ等の水辺の生き物の姿を目の前で見て大変感激していました。

子ども達は、このような稲作体験に関わった多くの人たちとの触れ合いや自然とのふれあいを通して、自分たちを支えてくれる人たちの存在を実感し、自分たちの住む地域に愛着を感じるとともに、感謝の心がはぐくまれていきます。学校としましては、そのような体験活動がもつ機能を十分生かしながら、豊かな心の育成に努めて参る所存でございますので、今後とも御支援、御協力を賜りますようお願い申し上げます。



里山20年を迎えて



立沢里山の会
初代会長
鈴木 榮

私は初代の会長でしたので、血気盛んな創成期について深く残る思い出を綴ってみたいと思います。

当初、現地は休耕田として長く放置され雑草が生い茂り、ゴミの不法投棄も多く、通学する子ども達にとっては危険な場所でありました。平成12年12月、「立沢里山の会」が設立して翌年、ボランティア約25名での清掃活動から作業が始まり、寄贈された木道の設置、除草や投棄ゴミの収集、水路の整備など力仕事ばかりでした。

こうした作業の中で、「里山の会」の活動目標が①希少种植物の保護地域を設ける②ホタル、メダカなどを体験と観察の場とする③自然が果たしている役割を知り、その適正な管理法を学ぶ④体験型の水田耕作、子供の稲作体験学習の場とする⑤公募による一般住民の自主的運営を基本に住民参加を促進すること、などが決定されました。

次の課題は資金作りでした。当初は市の補助制度の活用や寄贈などもありましたが、安定した資金確保のために「北守谷の夏祭り」への出店と定め、平成15年に初めて参加しました。最初はフランクフルト販売、翌年は金魚すくい、2カ年連続の赤字でした。翌3年目に「焼きそば」販売が大いに当たり資金確保の目途が立ちました。これには野木崎の婦人部の活躍で大いに助けられました。

平成18年5月、市、教育委員会、農業委員会の後援により「里山まつり」を開催、テーマ

は、野で遊ぶ(草笛、水鉄砲、ザリガニ釣り)、野に学ぶ(田植え体験、里山クイズラリー)、野を食す(野草天ぷら、餅つき体験、おにぎりや焼きそばのチャリティー販売)で、大いに盛り上がりました。

その後、「つくばフォーラム2007」での活動発表、茨城県自然博物館内での炭焼き、県内御前山への視察旅行の実施や、田植え稲刈り後の懇親会の開催など、数多くの楽しい思い出が作られたのでした。

平成25年、会員の中村洋さんが亡くなりました。中村さんは定例作業日以外にも田んぼの畦道や草取りを黙々としている姿が特に深く心に刻まれています。

最後に、里山の会の草創期に尽力して頂いた方々にお礼を申し上げます。

前会田市長、TXで利根川を渡って守谷に入り目に映る斜面林、この緑地帯を守った功績。また、守谷の自然は水と緑であるとの理念を貫き、里山づくりへの理解と協力、井戸掘り(上総堀)にも参加して頂いたことです。里山の小学生による田植えと稲刈り時に必ず視察して頂いた歴代の教育長の方々。里山の稲の手配、脱穀、もみすりなどご指導とご支援を頂いた前農業委員会会長の海老原さん。事務担当として活躍頂いた須賀三雄さんは市の総務部長で定年を迎え、その人脈や企画力で会を支えて頂きました。会計の南さんにも助けられました。

会員の皆様方には、ご支援・ご協力を頂き衷心よりお礼申し上げますとともに、里山の会のなお一層の発展を祈ります。



立沢里山の会発足 20 周年おめでとう



守谷山百合の会会長
立沢里山の会顧問
浅川利夫

里山とは、畑や田んぼがあり小川が流れて昆虫、魚捕りができる環境を言います。会発足当時は手探りの状況で理想が先行し活動が思うように進まなかったこともありましたが、子供たちに自然と触れる機会を作るため、計画した米作り体験は色々な問題がありました。しかし、当時農業委員会長を務めていた海老原邦夫さんの計らいで実施され、松前台小学校、御所ヶ丘小学校、大井沢小学校と今に続いています。田んぼに水を引くための「上総堀り」も思い出に残ります。会田元市長も井戸堀りに参加し飯塚攻一さんの指導のもと手掘りの作業を行い、水が出た時はみんなで万歳をしました。活動から5周年の際は「里山祭り」を行い、山野草の天ぷら、ザリガニ釣り、里山散策等を行い、楽しい時間を過ごしました。

里山を整備維持するため、活動資金確保・会員の交流の場として「北守谷夏祭り」の参加は大きな行事になりました。焼きそば作り販売は、慣れない手つきで汗をかきながら挑戦し、鉢巻き姿の須賀三雄さんの姿が印象的でした。米作りが縁で御所ヶ丘小学校ではゲストティーチャーとして里山を対象とした木の実の違いについて説明し、生徒と一緒に給食を食べた事もありました。

このような活動が実を結んだことは設立当時の会員の強い思いと新しい会員の参加協力により立沢里山の会が20年続けてこられたことと思います。

原風景が減少する中、五感を感じる自然との触れ合いは大切です。立沢里山の原風景が次世代に残せることを願い、20周年のお祝いいたします。



20周年を祝って



立沢里山の会
初代副会長
奥村峰子

もう20周年になるんですね。おめでとうございます。

立沢里山の会、立ち上げの頃は守谷の人口が急激に増えつつある時でした。私自身も家族とともに守谷に移り住んだ新住民の一人です。私がまちづくりを考えるようになったきっかけは、守谷市（当時守谷町）が募ったアイディアモニターやまちづくりネットワークに参加したことでした。自分たちが住むまちをより良くしたい、子供たちに豊かな自然環境を残したいという思いがありました。里山は放置すると荒地地になり人の手で整備していかないと存続しないと知り、市の協力もあって「立沢里山の会」立ち上げメンバーの一人として参加させていただきました。

当時はゴミの投げ捨てが多々あり、最初はゴミ拾いから始まりました。関心を持ってもらおう、活動の輪を広げようと環境を生かしたイベントを開催したり、資金集めに夏祭りで出店をしたり、楽しみながら少しずつ輪を広げていきました。多くの方々のご協力のもと、草刈りをしたり、木道を設置したり、井戸を掘ったり、荒地地が環境学習の場となるまで整っていきました。夏の夜、蛍が乱舞していた時の感動は忘れられません。また近隣の小学生が毎年田植えの体験ができるまでになった時は、地道に続けてきて良かったと感慨深いものがありました。環境を守っていくには、継続が大切です。今も活動しておられる皆様に感謝と敬意を表します。次世代により良い環境を引き継げるよう「立沢里山の会」の今後の発展を願っております。



立沢里山での観察会

新田ミチ子

立沢里山では、大井沢小学校の四年生の皆さんと観察会をさせていただきました。

地球上ではいろいろな種類の生き物が共に暮らし、互いに繋がり合い、いろいろな役目をし、その中で人はその「恵み」を受けて生きています。里山は「命」が循環している事を学べる貴重な場所でした。田んぼや水路では、植物プランクトン、メダカ、オタマジャクシ（トウキョウダルマガエル）、ヤゴ、テナガエビ、ドジョウなど。陸ではイナゴ、チョウ類、カマキリ、ハチ、トンボ類、クモ類、ヘビ、鳥類のキジ、チュウサギ、サシバなど。植物を土台とした、食べたり食べられたり、食物連鎖、違う生き物が共に生きる共生も観ることが出来ました。

春の観察会では、クイズ形式で、食物連鎖の土台となる植物が頂点にいる人とどのように関わっているのか？虫（食草）や鳥とはどうか？不思議を探しました。

また秋には、動けない植物が子孫を抜げていくどのような工夫をしているか。子供たちとその巧みさを実際里山と周辺の植物の種を手にとって考えました。服にくっつけたり（オオオナモミ、イノコヅチ、ヌスビトハギなど）飛ばしたり（ガマ、ガガイモなど）はじける瞬間を見たり（フジ）して。

子供たちが、里山から自然の仕組みの巧みさ・脆さに気付く事が出来たらと思います。

また里山は私にとっても学びの場でした。特に上総（かずさ）掘りを見学でき先人の知恵に触れられた事が強く印象に残っています。

私は十年間の会員でしたが、立沢里山が二十年以上管理維持されてきた事は、歴代の会員の皆様の熱意と努力の賜物と感謝いたします。



20周年に寄せて （里山に魅せられて）

南 哲郎

まずは立沢里山の会の20年経過、誠におめでとうございます。

私がこの会のお世話になるようになったのは2004年（平成16年）のこと、体力的には自信がなく軽作業しかお手伝いできませんでしたが、田んぼ周辺の生き物たち、特に大小の植生の多様性には深く魅せられました。印象に残っているのはありふれた種ばかりですが、春のニョイスミレやノミノフスマ、生で食べられるノヂシャ、斜面林等のウワミズザクラ、イヌザクラなど、夏はアギナシやオトギリソウ、タコノアシなど、秋はツルマメ（大豆の原種）イボクサ、シロシキブ等、さらに冬にはロゼットの形で冬を越すハルジオン、キュウリグサ、オニタビラコなどで、本当に多様な草花や木々のもとで活動ができたのは大変幸せでした。

実は小生、幼少のころは田植え、稲刈り、畔の草刈り（牛のえさ）などの手伝い、遊びと言えば、夕方の田んぼに群舞するギンヤンマ釣りや、竹馬や竹とんぼ、凧作りなどに夢中でした。しかし、社会人になり、これらのことから遠ざかるを得ませんでした。そして定年後最終的に守谷に落ち着くことになり、入会させていただいた次第です。

すばらしい仲間との出会い、そして小学校の田植え、稲刈り、自然観察会など授業のお手伝いで多くの子供たちとふれ合うことができました。竹炭作りなど貴重な体験をもさせていただきました。

この里山環境が末永く維持されることを切に願ってやみません。今後とも「立沢里山の会」が一層にぎやかになることをお祈りいたします。多謝



立沢里山と私

小田原 実

立沢里山の会の 20 周年記念おめでとうございます。

参加当時を思い起こすと、会社勤務を止めて何かすることはなかったかと思っていた時に、ボランティア募集の案内を見て行ったのが立沢里山の会でした。

田んぼの草取り、ゴミ収集が初めての作業でした。2 年目には上総掘りの井戸掘りも体験しました。平成 18 年には「里山祭り」を行いました。子供達が作った案山子を田んぼに並べ、テントでは餅つき体験や、おむすび、やきそばの販売も行い、おいに賑わいました。平成 19 年にはミュージアムパーク茨城県自然博物館で炭窯制作セミナーが行われました。出来上がった竹炭を取り出していくうちに、すっかり「とりこ」になりました。今でも博物館ボランティアとしても活動をしていて、竹炭を焼き、博物館の「野外ふれあいガイド」では、炭焼き窯の見学会も行っています。立沢里山の会も年一回。前年の秋から竹を切って、割って、炭焼きの準備は、なかなか大変な作業ですが皆さんと協力して炭を焼いてきました。しかし、新型コロナウイルスにより博物館は来館制限でボランティア活動は休止することが多くなり、炭焼きも昨年は休止しました。今年も三月の炭焼き延期となりました。早くコロナウイルスの制限がなくなり、炭焼きができる事を祈ります。そして、これからも里山で子供たちが楽しそうに遊ぶ様子を見たいと思います。



資料一覧 (CD 収納)

「立沢里山20周年記念誌」

CD 版

関係資料一覧：

1. 立沢里山の会の会則
2. 組織体制
3. 会員名簿（歴代、物故者）
4. パンフレット（立沢里山、竹炭）
5. 総会資料（予算決算、事業計画）
6. ホームページ 里山日記別冊
7. 立沢里山新聞
8. もりや里山新聞
9. 児童生徒の感謝感想文
10. 資料
 - ・ 里山写真集、動画集
 - ・ 田んぼの学校テキスト（出前授業）
 - ・ 自然観察会テキスト
 - ・ ウォークラリー掲示資料
 - ・ 里山クイズ、ビンゴ
 - ・ 市民大学里山セミナーテキスト
 - 炭焼き、ホタル、ヤマユリ、里山と農林業
 - 草花、キノコ、森林、
 - 田んぼの生物多様性、野鳥
 - ・ 水管理資料
 - ・ ポンプ運転要領
 - ・ 山菜説明資料
 - ・ サツマイモ説明資料
 - ・ 炭焼き資料（マニュアル）
 - ・ 保有機材等一覧表
 - ・ その他

編集後記



編集打ち合わせ

【連絡先】

守谷市民活動支援センター内 「立沢里山の会」

〒302-0119 守谷市御所ヶ丘 5-25-1 守谷市市民交流プラザ 2 階

Tel0297-46-3370 fax0297-46-3320

編集後記

私は里山のヘイケボタルの事でお手伝いを始め、その後は皆さんに助けて頂き、活動を続けて来られました。今回は20周年記念誌編集のお手伝いの話があり、さて、どうしたものか。初代会長の鈴木榮さんに相談し、やはり初代事務局の須賀三雄さんに繋いで頂き、作業を始めました。

まずは私が20年を通して概観できるように年表の作成を始めました。これから参加される方々にも会の活動目標が伝わる資料があればよいと思ったからです。事始めは主に須賀さんの議事記録、写真、その後は清野修会長の丁寧にまとめられた資料があり、市の会報を閲覧し、スタートから近隣住民の多くの皆さんが参加する姿を思い出しながら進めました。立沢の自然を熱心に記録された方々もいました。

皆さんと活動を振り返り、盛りだくさん詰めたものになったと思います。これまでに里山活動に参加された方々は、「守谷の自然環境を生活の中に残したい。」と考え、参加されたと思います。これからも多くの方の参加を得て活動が続くことを祈ります。(今村 敬)

2022 年 3 月 31 日発行

発行 立沢里山の会

発行責任者 清野修

本誌は、公益信託「エコーいばらき」環境保全基金を活用して作成しました。